

## 視察報告

## 旧海部町におけるフィールドワーク

歴史・風土・暮らしから見えるもの～鞆浦・奥浦エリアを中心に

中川啓子

## I. はじめに

徳島県の南端に位置する漁師町、海部町（かいふちょう）。2006年の市町村合併により現在は海陽町の一部となった小さな町である。

和歌山県立医科大学の岡檀氏は、自身の研究をまとめた著書『生き心地の良い町』で、日本で最も自殺率が低い町として海部町を取り上げ、海部町コミュニティの「5つの自殺予防因子」を解き明かしている。

自殺予防因子とは、「緊密すぎない人間関係」「多様性の重視」「人物本位の評価」といったもので<sup>1)</sup>、これらは、成熟社会研究所で取り組む「信頼の現場」研究プロジェクト<sup>2)</sup>につながるとして、岡氏を招いた特別公開講座<sup>3)</sup>を行うなどしてきた。

2016年10月、「信頼の現場」研究会のメンバーである大阪大学特任教授の土井勉氏の呼びかけで、海部町視察が実現し、そこに参加する機会を得た。

## II. 調査概要と手法

海部町（本来は旧海部町とすべきだが、ここでは海部町で統一する）は、大阪駅前から長距離バスと車を乗り継ぎ約4時間半の位置にある。徳島県南端、太平洋に面した人口約3,000人、高齢者率36.3%の町である<sup>4)</sup>。

「鞆浦」「奥浦」「西山」の3つのエリアで構成されており、今回の視察では町の核となる鞆浦と奥浦を中心に観察調査を行った。

調査手法は、住民へのインタビューを含めたフィールドワークである。インタビューは、出会った人にその場で行う簡易なものと、事前に依頼をした上でまとまった時間行うものの2種とした。

## III. 鞆浦エリア

小さな漁港からのびた道沿いに家が密集して建ち並び、いわゆる漁師町である。家の裏にも細い路地が続くが、シニア用電動カートがちゃんと通れる仕様になっていた。山に囲まれた平地部分が宅地で、山際の高台には寺や神社が建つ。

町のあちこちにベンチや椅子があり、腰をおろして休憩している年配の方々は皆、気さくインタビューに対応してくださった。

自身の十人兄弟の半分が漁師だったこと、漁港に面した広場（水揚げ場）で昔は船大工が船づくりをしていたこと、広場に面した倉庫には船地車がおさめられていること、伊勢えびやマグロ・カツオ漁などが行われていること、外国から来ている漁師も多いこと（地元漁師に聞いたところ、約100人の漁師のうち10人程度がインドネシア等から来ているとのことだった）などである。

家に備え付けられた“みせづくり”（収納式の縁台で、他府県では、あげみせ・バッテリー床机とも呼ばれる）を組み立てて見せてくれた方もいた。

昔は300人以上いた海部小学校の児童も今では40人ほど（地元の話によれば、そのうち鞆浦から通うのは4人）になり、人口は減っていると言いつつも、その表情に悲壮感はなく、地元の祭りの様子や魚介の美味しさなどを楽しそうに話してくださった。

寺の住職にも話を聞くことができた。檀家数は少ないが、それとは関係なく、留守にしている間は地元の人たちが寺の手入れに来てくれるのだという。住職曰く、住民からは「他人の不幸を放っておけない気質」を感じるそうだ。



写真1 海部町藪浦地区の漁港



写真2 藪浦地区の路地



写真3 収納型の縁台“みせづくり”

#### IV. 奥浦エリア

町役場やショッピングモール、海部小学校、JR海部駅などを含む、海部町の商業エリアである。

北側には二級河川の海部川が流れおり、その水域はかつて林業で栄えた物流拠点であった。また、小学校裏の小山は海部城跡で、字には「堤ノ外」とあり、城の名残を残している。

旅館や飲食店、美容院などが並ぶ町中ではあるが、営業していない店舗も目立った。地元の高校卒業と同時に都会へ出た若者はそのまま戻らないことが多いという。

しかし一方、外から多様な人が訪れることもある。海部川河口は全国有数のサーフスポットとなっており、時期によってはサーファーが多数訪れ、滞在する

そうだ。

また、アジア圏から働きに来ていた人が、海部町の人と結婚してそのまま移り住んでいるという話も聞いた。

海部町は四国お遍路のルートなのでお遍路さんの姿を見かけることもあり、旅館にもお遍路さん向けの物干し場がしつらえてあった。

奥浦では、最近まで旅館を経営されていた方に、お話をいろいろと聞くことができた。

山林が豊富で材木業で栄えた時代のこと、戦後は25件以上の飲み屋があったこと、映画館が2つあったことなど、町の昔の様子を思い出とともに語る中に「朋輩組（ほうばいぐみ）」の話が出た。

朋輩組は「海部町に現存する江戸時代発祥の相互扶助組織」で地域の男性が加入するグループで構成されているが、会則・会費などは無く入退会は自由という「開放的で風通しがよく、来るものを拒まず去るものを追わない」組織となっている。[岡檀, 2013]

この特徴的な組織の存在も、海部町の生き心地の良さにつながるものの一つである。

#### V. おわりに

山・川・海の自然に囲まれ、昔ながらの町並みに心落ち着く…、海部町は、外部から調査に訪れた我々にとっても大変居心地のよい町であった。たった2日間の滞在であったが、調査中に出会った方々は皆、快く

話に応じてくださった。

気さくで親切な人柄，過剰ではないが確かな郷土愛，特別視や差別をしない気質など，一部ではあるが海部町の心地良さにつながる要因を現地で体感することができた。

海部町の柔軟性と多様性は，これからの地方のあり方や人の生き様にも，大いに参考になるものではないだろうか。

#### 謝辞

海部町視察を企画してくださった土井勉教授，および調査メンバーの皆様，調査にご協力いただいた海部町の皆様には，厚く御礼を申し上げます。

#### 注

- 1) 注3の講座において岡氏が発表で示した資料のデータによる
- 2) これからの社会と市民のための新しいシステムを「信頼」をキーワードに解き明かす。教育・企業・地域など，社会のあらゆる分野に存在する「信頼社会」のあり方を現場から探るべく，研究・情報交流・意見交換を行う。
- 3) 2016年7月4日開催 特別公開講座「自殺率が低いまちには理由がある！『生き心地の良い町』著者・岡檀さんに聞く！」
- 4) 注3の講座において岡氏が発表で示した資料のデータによる

#### 参考文献

岡檀（2013）『生き心地の良い町ーこの自殺率の低さには理由がある』講談社